

# 幼児の適応行動と心理的「場」との関係

西元 直美 (naomi724@d1.dion.ne.jp)  
[大阪城南女子短期大学／武庫川女子大学]

The relation between preschooler's adaptive behavior and psychological "field"

Naomi Nishimoto

Osaka Jonan Women's Junior College/Graduate School of Clinical Education, Mukogawa Women's University, Japan

## Abstract

The purpose of this study was to examine the relation between preschooler's adaptive behavior (quasi- adaptive behavior) and environment. The preschool teachers were asked for describing preschooler's behavior at kindergarten. Descriptions of quasi- adaptive behavior were classified from the point view of function; behavior and places (scene) and its meaning. As a result of classification and correspondence analysis to examine relations of places and behavior, four groups were extracted. Those four groups were interpreted as "scene of stress for peer relationships (= free play scene)", "scene of stress for social situation (= separation and reunion scene)", "individual characteristic", "scene of stress for teacher's instructions (= class activity scene)" from its functional meaning. Then the difference in strength quasi- adaptive behavior group by 3 scene ("free play scene", "separation and reunion scene", "class activity scene") was analyzed. The findings indicated that behavior group of "social adaptation" was higher strength at class activity scene. The examination of the viewpoint on a basis of psychological "field" perspective was important and it has power for understanding preschooler's adaptive behavior.

## Key words

preschooler, adaptive behavior, quasi-adaptive behavior, psychological "field", preschooler

## 1. 問題

幼児期において集団保育経験が一般的である今日、保育・幼児教育現場は幼児にとって生活時間の大部分を過ごす場である。保育環境について保育所保育指針（1999）では、「保育の環境には、保育士や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、さらには、自然や社会の事象などがある。そして、人、物、場が相互に関連し合っ、子どもに一つの環境状況をつくり出す。」と述べられている。環境には、保育活動が展開される保育園や園内の遊技スペースなどの物的なものから構成されている環境や、仲間などの人的なものから構成されている環境が考えられる。人的環境、物的環境のいずれについても客観的な側面から捉えられる物理的な環境と言える。しかし幼児をとりまく環境として、状況が作り出す場・文脈としての環境もある。状況が作り出す場・文脈としての環境とは、関係性が生じる場であり、その場が幼児にどのような意味づけ、機能を有するものであるかが強調された環境と言える。

本研究は、幼児が何らかの意味で場面によって引き起こされる固有の反応、言い換えれば、状況に適応する必要がある場面での行動に注目して、子どもの行動と環境との相互作用の在り方を解明しようとするものである。ここでの環境とは子どもが作り出している心理的「場」である。そうした環境は可視的ではなく客観的に捉えられる物理的な

環境に対してその存在が示されにくい。たとえば、登園場面は、物理的には出入り口での保育者および養育者との活動ということになるが、そこは母子の分離という子どもの心理的ストレスが強くなる場面となる。可視的な環境としては園の出入り口であり、親子と保育者のいる環境となるが、幼児にとってそこは分離によって生じる不安や悲しみの存在する「場」と認識されることになる。保育所、幼稚園という環境は、物理的な意味においてのみならず、そこでの心理的「場」、もしくはその働きという意味においても幼児の行動を規定していることになる。環境と個人の行動は切り離して考えることは不可能であり、子どもを捉えようとする際、その対象児の示す行動にだけ目を向けるのではなく、その子どもが作り出す心理的な「場」にも注意することが必要となるのである（Bronfenbrenner, 2004）。

子どもを取りまく環境である園環境の特徴について言及している研究として、幼稚園という物理的「場」の特徴から問題を抱えた子どもの変容を捉えた倉持、柴坂（1996）による研究が挙げられる。他児とうまく遊べない対象児が他児を受け入れて遊べるようになった要因として、同朋と十分関わることでできる環境の影響が指摘されている。幼稚園の物理的「場」の特徴として、周囲にたくさん友だちがいるという状況が指摘できる。そこにいて対象児は、同朋から評価され、それによって自信をもち、自己主張が可能になるのである。また、彼らは自由に遊びに取り組める自由保育という形態が、人との関わりの時間を確保し、幼児が人との関わりを変容させる要因となったと述べている。この研究で示されている園環境、特に自由保育場

面の特徴は、幼児にとって自信の獲得や自己主張の機会を提供するという機能を有する「場」とであるとみることができる。

園環境の特徴は、ストレスを経験する心理的「場」とあるということからも捉えられる。堀池ら（1999）は保育者から幼児がストレスを感じていると考えられる出来事を抽出し、ストレスを、片付けを強要されたり設定保育で好きな遊びができないなどの「保育者が意図的に要求すること」、「友達との関係」、「園行事」、思う遊びができないなどの「遊びに関すること」の4つに整理している。さらに、幼児に対してストレス項目の経験度と嫌悪度を調査し、友達との関係や遊びに関連する事柄のストレス度が高いことを示している。また、小林（2003）の研究においても、保育者の考える幼児のストレスとして「友達とのトラブル」「集団生活のルールが守れないとき」が自由記述に挙げられている。これらの研究にみられるストレスは、活動場所や交渉相手という要素ではなく、その場面において求められる事柄やそこで起きていることに関するものである。そうした非可視的な要素は環境がもつ「働き」であり、幼児が作り出す心理的「場」としての環境と言える。

このように、保育環境と一言で言われるものの中には集団活動可能な空間と、相互交流可能な対象と、それらが相互作用することによって作り出される心理的環境が存在しているのである。しかし、そこにおいて展開される活動が作り出す心理的状态は、見過ごされがちであるように思われる。活動内容や文脈によって意味づけされた環境は、個々の子どもたちにとって行動を制約するものでもあり、誘発するものにもなっていると考えられる。ものの争奪によって引き起こされる喧嘩は、遊技スペースという物理環境と、物を介した関係性の緊張という心理的環境がなければ出現しないのである。これまで、適応的ではない行動も含めて幼児にみられる多様な行動が、どのような意味を持つのかについて、その環境要因との関係で議論されてきているが、加えて子どもにとってその場、その環境の意味づけからの検討が必要である。物理的環境が同じであっても、子どものストレス認知や耐性によってその環境への適応行動は変化してくる。母子分離への抵抗行動は、物理環境としての幼稚園と心理的環境と子どもの個人差が作り出すものと考えられる。

幼児の行動と環境は相互に関係し、子どもはその中で状況に意味づけし、適応していくことになる。行動と環境が相互に関係しているとすれば、意味づけされた状況における行動特徴は時間が経過しても安定していると考えられる。本研究では、幼稚園の活動の中で、適応する必要がある場面、心理的「場」を作りやすい場面を抽出し、そこでみられる行動特徴と心理的「場」との関連、およびその関連の時間経過における安定性から、心理的「場」と適応行動について検討することにする。

適応には様々なものがある。その状況に適合している行動は適応行動であるが、その状況に適合していなかったと

しても自分なりにその状況に対処している行動は適応行動と言えるだろう。逆に、その状況に適合していたとしても適応的ではない行動が考えられる。本研究ではそうした擬似的な適応を捉えるために、心理的ストレスに対する頑張りについて検討を加える。ストレス状況下で頑張っている行動は適応的であるが、なかには子どもにとって快適さがないと考えられるものもある。その時点で適応的にみられても後に振り返ったとき、不自然に感じられるような適応行動もあると思われるのである。

そうした不自然な適応行動は、保育者が“ちょっと気になる”と認識する行動のなかに含まれているように思われる。“気になる”行動として指摘されるのは保育者が対応を迫られるような、いわゆる問題行動が大半であるが、なかには対応に苦慮するわけではないが“気になる”と認識される行動もある。たとえば、（やりやすい子どもだが）集団のなかで自分を出せない、泣きたいのに泣かない、大人にとって都合のいい子など（井口，2000；吉村，2003）である。これらの行動は保育・幼児教育現場ではその状況に適合するための行動であり、一見適応的な行動と見なすこともできる。しかし、これらの行動は子どもにとって真に適応的な状態ではなく、保育者からもなんとなく“気になる”と認識される疑似的な適応と言える。

上述のような適応を本研究では擬適応と呼び、区別して検討する。擬適応行動は状況に合わせた行動として表出されるものであることから、心理的「場」によって引き出される行動であることが予測される。そこで具体的には、幼稚園における幼児の擬適応行動と環境との関連から、幼稚園の心理的「場」について整理し（研究Ⅰ）、擬適応行動と環境との関係を検討する（研究Ⅱ）。

## 2. 研究Ⅰ

### 2.1 目的

幼稚園における幼児の擬適応行動とそれが生起する場面との関係について検討し、本研究で仮定している幼児にとっての心理的「場」の存在が、保育者によってどのように捉えられているのかを探索的に検討する。

### 2.2 方法

#### 2.2.1 対象

保育者（私立幼稚園および私立保育園勤務）97名。平均年齢28.5歳（レンジ52歳～20歳）。平均経験年数6.8年（レンジ24年～1年未満）。

#### 2.2.2 調査時期

2005年5月、10月の2回。

#### 2.2.3 調査手続き

本研究で擬適応行動と呼んでいる行動は、一見適応的であるがなんとなく“気になる”行動として定義される。調査に際しては、園長を通じ、「気がかりな行動や問題があるわけではないがなんとなく“気になる”子」の具体的な

特徴について自由記述形式での回答を依頼した。

## 2.2.4 結果の分類

回答は無記名で行われた。回収した記述には複数の異なる内容が含まれているものもあったため、内容的に分割できる箇所を分割し、一文に複数の内容が含まれないように細分化した。その結果、最終記述数は199項目となった。「気になる子」の行動と生起場面との関係を検討するため、細分化した記述内容について、行動内容についての分類と生起場所についての分類をKJ法に準じて分類した。分類作業は発達臨床心理学専攻の博士課程院生2名と筆者が行った。その後、妥当性を検討するために、さらに心理学の教員を含め再分類の作業を行った。

## 2.3 結果

自由記述内容を分類した結果、行動内容については21項目の行動カテゴリー、場面については①園（子ども同士の場面）、②園（保育者との場面）、③園（その他）、④登園降園時、⑤園と家庭、⑥家庭、⑦その他の7つの場所（場面）カテゴリーが抽出された（Table 1）。

コレスポンデンス分析を用いて行動と場面との関連が検討された。Table 1のクロス集計結果にコレスポンデンス分析（SPSS, 11.5j）を適用した結果、カテゴリースコアの分布状況から4つのグループの存在が推定された（Figure 1）。Table 2に場面カテゴリーと行動カテゴリーの分類関係と行動カテゴリーの具体例を示す。

## 2.4 考察

保育者が「気になる行動」と認識する行動内容を分類し、その結果をコレスポンデンス分析にかけたところ、4グループの存在が考えられた。場面カテゴリーと行動カテゴリーの組み合わせによってグループの特徴が示されているが、以下、その場面について整理してみる。

グループⅠには「園（子ども同士の場面）」（場面カテゴリー）、「他児とのトラブル」や「仲間と遊べない」（行動カテゴリー）などが含まれている。グループⅠが意味している場面とは、幼児にとって他児との協調や集団活動といった仲間関係形成という負荷のかかる場面と言える。保育場面においては、大人の統制の低い「自由遊び場面」に対応すると考えられる。「自由遊び場面」は自主的に活動する場面であり、他児との関わり方を学ぶ場面である（倉持・柴坂, 1996）。幼児にとってポジティブな経験の得られる場といえるがその反面、主体的に活動することが課題となる場面でもあるといえるだろう。

グループⅡには「柔軟性がない」「我慢している」「自分をださない」（行動カテゴリー）などの抑制的あるいはネガティブな反応傾向がみられることから、ストレス負荷の高い場面として子どもに受け取られていることが考えられる。場面カテゴリーとして含まれているのは「園（その他）」というカテゴリーであるが、「登園降園時」という場面が含まれていることから、子どもにとっての我慢が表出しやすい場面と考えられる。

グループⅢは「感情のコントロールができない」「非従順」（行動カテゴリー）などが含まれている。場面として

Table 1: 場所（場面）カテゴリーと行動カテゴリー別頻度

	園(子ども同士の場面)	園(保育者との場面)	園(その他)	登園降園時	園と家庭	家庭	その他
1 他児とのトラブル	14	0	3	0	0	0	0
2 感情のコントロールができない	0	2	8	0	0	1	0
3 集団行動できない	0	3	0	0	0	0	0
4 非従順	0	1	1	0	0	0	0
5 相手によって態度を変える	3	0	1	0	1	0	0
6 仲間と遊ばない	5	0	1	0	0	0	0
7 うそをつく	0	5	0	0	0	1	0
8 柔軟性がない	2	1	3	0	0	0	0
9 言葉で表現しない	1	1	4	0	0	0	0
10 我慢している	6	2	6	1	1	0	0
11 自分をださない	8	2	13	1	1	0	0
12 自分がない	1	3	3	0	1	0	0
13 がんばっている	1	4	7	0	3	1	0
14 大人の目を気にする	2	6	6	0	4	1	0
15 保育者の気をひこうとする	0	8	0	0	0	0	0
16 分離不安なし	0	0	1	2	0	0	0
17 年齢不相应	0	2	3	0	2	0	0
18 園と家庭のギャップ	0	0	0	0	0	0	4
19 言語面の問題	0	1	1	0	0	0	1
20 視線の問題	0	0	4	0	0	0	0
21 分類不明	1	3	5	1	2	2	2

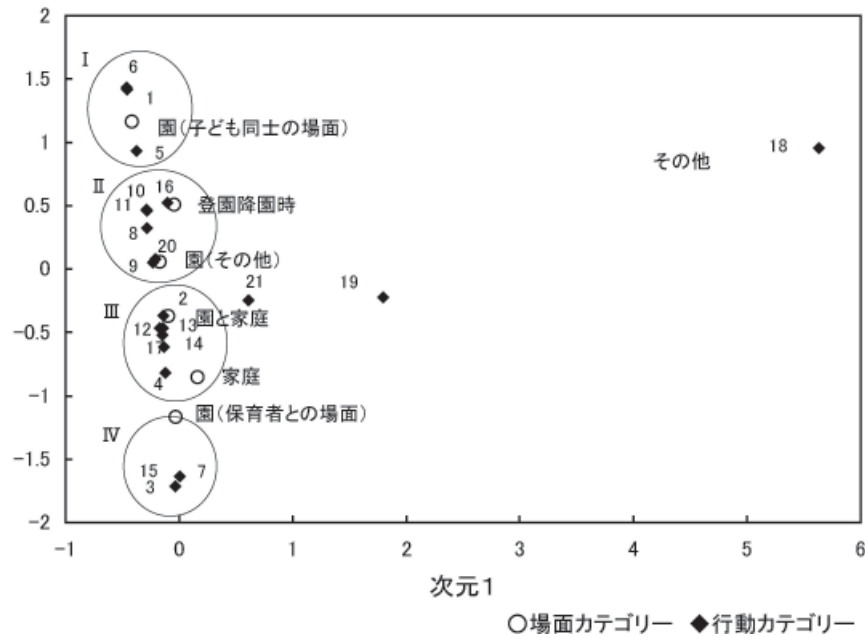


Figure 1: カテゴリー・スコア (場面・行動)

Table 2: 場所 (場面) カテゴリーと行動カテゴリのグループおよび行動カテゴリの具体例

グループ	場所 (場面) カテゴリー	行動カテゴリ	具体例
I	園 (子ども同士の場面)	1 他児とのトラブル	影で悪口をお友達に言ったり、手を出したりしている。
		5 相手によって態度を変える	自分から保育者に話しかけてくることは少ないが、子ども同士になるときつい言葉を相手に投げかけている姿を見る。
		6 仲間と遊ばない	一人で遊んでいる姿がよく見られ、自ら友だちや保育者に関わろうとする事がほとんどない。
II	登園降園時/園 (その他)	8 柔軟性がない	ささいなことにも几帳面で、少しでもそのことに反することがあるとすねる。
		9 言葉で表現しない	男の子らしい遊びをして活発だが、(表情もある)言葉がはず、自分の思いが表現できず、何か困った時に泣いてしまい、内にこもってしまう。
		10 我慢している	自分のおもちゃを取られたり、嫌なことを言われたりしても相手に伝えず保育者にも伝えずガマンしている。
		11 自分をださない	喜怒哀楽の表情がほとんどなく自己主張することがない。
		16 分離不安なし	いつも親から離れるのを嫌がらず一度も泣いたところを見たことがない。
	20 視線の問題	なかなか目が合わない。	
III	園と家庭/家庭	2 感情のコントロールができない	何かわるいことや間違ったことをしたとき、保育者や他児にそのことを指摘されると大声でわいわい泣く。泣くと長い。
		4 非従順	いろんな事柄に対しても素直に聞き入ることができず、反抗的である。
		12 自分がない	周りの意見を聞き、自分の意見がない。大人に対しては「いい子」「かしこい子」。
		13 がんばっている	自ら保育者に頼ってきたり、甘えてくることがない。
		14 大人の目を気にする	普段、生活する中で特に問題なく、自分で何でもやろうとするかしこい子だが、保育者や保護者の顔をよくうかがっている。
	17 年齢不相応	普段の設定保育の時にも、先生の問いかけに対して、すごく難しい大人言葉を使う。そのわりに制作・絵画が幼いように思う。	
IV	園 (保育者との場面)	3 集団行動できない	他児が先生の話の聞いているなかでひとり走り回って落ち着きがない。
		7 うそをつく	注意してもわざと目をそむけたり知らないふり、うそをついて他の子のことばかり言う。
		15 保育者の気をひこうとする	一人の保育士をじっと見つめて、にたにた笑ったり一人じめしようとする事が多い。

は「園と家庭」「家庭」が含まれており、子どもの本来的な行動特徴と関係している可能性が考えられる。言い換えれば、このグループに属する行動カテゴリー群は、場面あまり依存しないカテゴリー群とも考えられる。グループIVには「集団行動できない」「うそをつく」(行動カテゴリー)など反社会的な反応傾向がみられる。場面としては、保育者が存在する集団において、保育者を意識した活動が求められる場面と考えられる。ここでは保育者が指示的になりやすくもある。その代表的な場面としては「設定保育場面」が考えられる。

研究Iでは予備的調査として、子どもの行動を指標として「場」とその「心理的意味」について検討を加えた。その結果、保育場面は幼児にとって仲間関係形成という負荷のかかる「自由遊び場面」、強いストレス場面である「登園降園場面」、保育者が指示的になり保育者の存在が強く意識される「設定保育場面」の3つの場面に整理された。ここでは場面の選定が中心として扱われたが、実際にどの場面において擬適応が多いのかという検討が必要となる。研究IIでは研究Iによって選定された「自由遊び場面」「設定保育場面」「登園降園場面」の3つの場面について、実際に擬適応行動が生じるのか、またその生起が安定しているのかどうかについて検討された。

### 3. 研究II

#### 3.1 目的

研究Iの結果から選定した「自由遊び場面」「登園降園場面」「設定保育場面」ごとに、担当園児の擬適応行動の評定を保育者に依頼し、擬適応行動と環境(場面)との関係を短期縦断的に検証する。

#### 3.2 方法

##### 3.2.1 対象児

2007年度3歳児入園児57名(男児36名、女児21名)。

##### 3.2.2 調査時期

第1回目:2007年12月(10月~11月の行動評定)。第2回目:2008年3月(2月~3月の行動評定)。

##### 3.2.3 調査手続き

保育者に担任クラスの園児について「幼児の擬適応行動項目(50項目)」(気になる行動群(西元,2006;2007))の評定を依頼した。主観的程度を取り出すため、3つの場面それぞれにおいて、各項目がどの程度あてはまるのかを線分上に縦線で示すことによって、相対的強度を測定した。線分は左端が「まったくあてはまらない」、右端が「非常によくあてはまる」であり、左端から縦線までの長さが測定された(最小0mm~最大50mm)。

### 3.3 結果

#### 3.3.1 場面による擬適応行動の差異

擬適応行動項目について、西元(2007)で抽出された3

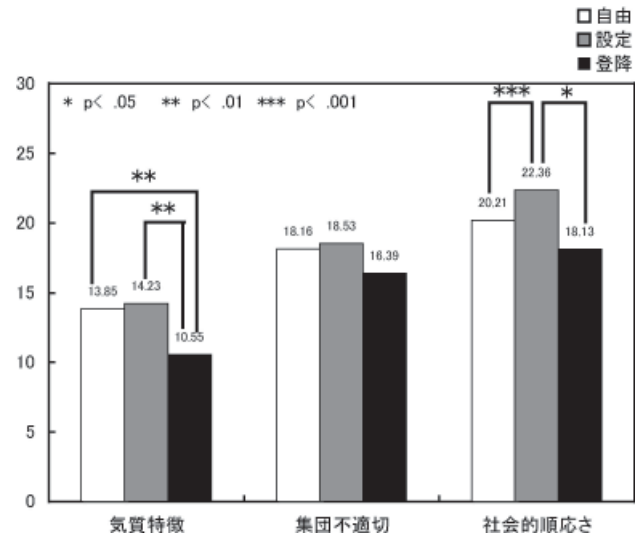


Figure 2: 因子得点 (1回目: 11月)

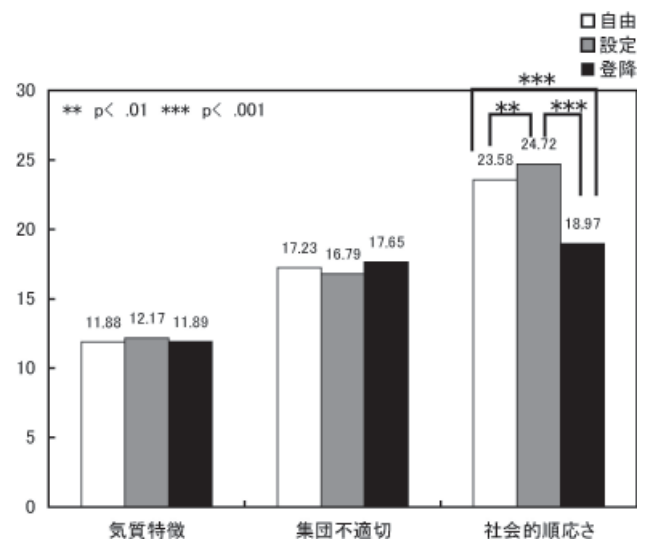


Figure 3: 因子得点 (2回目: 3月)

因子(「気質的特徴(17項目、 $\alpha = .75$ )」「集団行動の不適切さ(19項目、 $\alpha = .71$ )」「社会的順応さ(14項目、 $\alpha = .65$ )」による項目群の平均点を因子得点とし、因子得点における場面の差の分析を行った。因子別に場面の差についてt検定を行った結果をFigure 2、3に示す。

第1回目では、「気質的特徴」因子に関して、「自由遊び場面」および「設定保育場面」の得点は「登園降園場面」の得点よりも有意に高いことが示された( $t(49)=2.82, p < .01$ ;  $t(49)=3.27, p < .01$ )。「集団行動の不適切さ」因子に関しては場面による差は見られなかった。「社会的順応さ」因子については、「設定保育場面」の得点が「自由遊び場面」および「登園降園場面」の得点よりも有意に高いことが示された( $t(56)=3.92, p < .001$ ;  $t(51)=2.67, p < .05$ )。第2回目の調査では、「気質的特徴」因子、「集団行動の不適切さ」因子に関しては場面による差は見られず、「社会的順応さ」因子に関しては、「設定保育場面」の得点が「自由遊び場

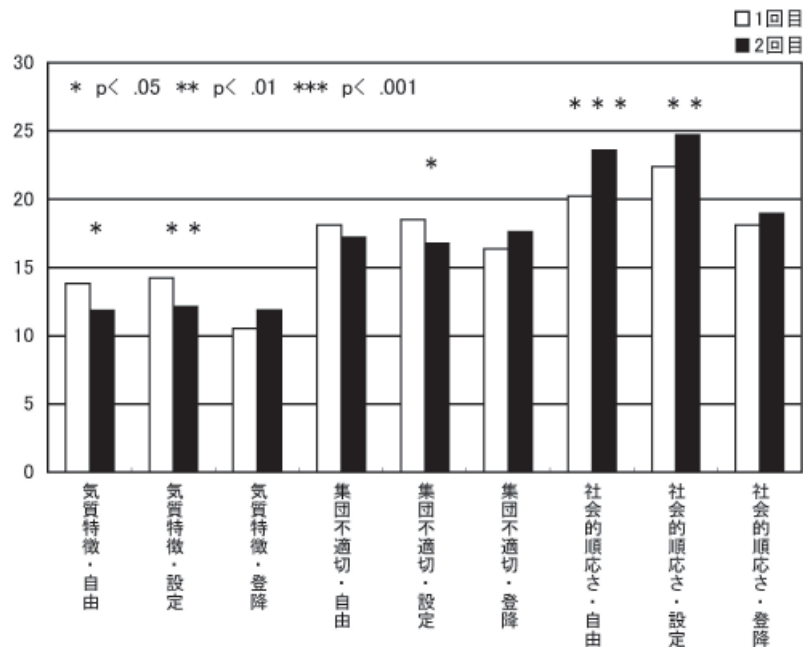


Figure 4: 因子得点 (1回目・2回目)

面」および「登園降園場面」の得点よりも有意に高く ( $t(55)=3.31, p < .01$ ;  $t(48)=5.60, p < .001$ )、また、「自由遊び場面」の得点のほうが「登園降園場面」の得点よりも有意に高かった ( $t(48)=4.38, p < .001$ )。

### 3.3.2 安定性の検討

場の効果の安定性を検討するため、第1回目と第2回目の結果について因子・場面別にt検定を行った。結果をFigure 4に示す。

「自由遊び場面」と「設定保育場面」の「気質の特徴」因子得点、「設定保育場面」の「集団行動の不適切さ」因子得点においては、第1回目のほうが第2回目よりも有意に高かった ( $t(55)=2.32, p < .05$ ;  $t(55)=2.91, p < .01$ ;  $t(55)=2.16, p < .05$ )。「自由遊び場面」と「設定保育場面」の「社会的順応さ」因子得点においては、第2回目のほうが第1回目よりも有意に高いことが示された ( $t(55)=4.30, p < .001$ ;  $t(55)=3.00, p < .01$ )。

### 3.4 考察

場面による行動特徴には差異がみられ、研究Iを支持するものであった。これらの「場」の効果は安定的であると考えていたが、調査時期により傾向に違いがみられた。

因子得点における場面の差を検討した結果、第1回目は「気質の特徴」因子と「社会的順応さ」因子において場面による差がみられた。両因子とも「登園降園場面」に比べて「設定保育場面」での擬適応行動が多いことが示された。「登園降園場面」は母子分離場面を含む強いストレス場面であり、擬適応行動の出現が予測されるが、短時間の場面でもあることから幼児の負荷は相対的に低く、擬適応的な行動を出現させるまでには至らなかったことが考えられる。

第2回目では「社会的順応さ」因子にのみ場面による差がみられた。「設定保育場面」「自由遊び場面」「登園降園場面」の順で擬適応行動が多いことが示された。第1回目においても「設定保育場面」が他の場面に比べて擬適応行動の多いことが示されている。研究Iで述べたように「設定保育場面」は、保育者が存在する集団において、保育者を意識した活動が求められる場面であり、幼児にとって保育者の指示に従うことと、集団行動することの両方が求められる場面である。そうした場面においては、他者に従順に従うような行動、適応的に振る舞おうと頑張る行動が誘発されやすいと言えるだろう。「社会的従順さ」因子について第1回目第2回目ともに場の効果が見受けられたことは、「社会的従順さ」と解釈される行動群に関係する場の持つ意味が、子どもの中では比較的安定していることを示唆するものと考えられる。

「社会的順応さ」と分類される行動は、保育者から見て頭かきに気がかりな行動ではないことが示されている(西元, 2007)。これらの行動は目につきにくいわけであるが、それは場面による出現頻度の差があるために一時的な行動として受け取られるからかもしれない。逆に、「集団場面での不適切さ」は問題行動のみられるケースに多くあてはまることが示されている(西元, 2007)。「集団場面での不適切さ」と分類される行動は、第1回目第2回目ともに場面による有意な差はみられないことから、場面の影響が小さくさまざまな場面で同様に出現すると言える。そのため問題行動として意識されやすいのかもしれない。

場の効果の安定性を検討した結果、「気質の特徴(自由)(設定)」、「集団場面での不適切さ(設定)」では第1回目より第2回目の得点が有意に低いが、「社会的順応さ(自由)(設定)」については第1回目よりも第2回目のほうが有意に高いことが示された。「社会的順応さ」が2回目が高まっ

ていたことは、幼児が集団生活を経験するなかで順応的な行動を学習していったことがうかがえる。集団適応しようとし順応的になる幼児の姿が考えられるが、全体として安定した場面の効果の存在が考えられる。

#### 4. 総合考察

子どもをとりまく環境は、物理的環境、人的環境と分類されるが、それらの環境が子どもにどのような意味をもつのかは物理的環境と人的環境の組み合わせに加えて、そこでどのような活動が促され、あるいは規制されるのか、といった場面のもつ役割、環境の個体に対する機能についての視点も必要と考えられる。研究Ⅰでは幼稚園という環境が子どもにとって、仲間との関係、保育者との関係から派生するストレスや、その場面で求められる行動をすることから派生するストレスなどによって形成される心理的な「場」があることが示された。行動は「場」の影響をうけ、誘発されたり抑制されたりする。擬適応行動についてその規定要因を考える際、外的要因のひとつとして行動の主体が主観的に認識している心理的「場」という要素も必要である。

研究Ⅱでは、心理的な「場」とその「場」のなかでみられる行動特徴との関係が示された。幼児の適応行動には「場面（心理的「場」）」という要因が関連しており、擬適応的な行動は「場面（心理的「場」）」、言い換えれば、その行動がみられる「環境」を踏まえた上で考慮する必要があることが示唆された。問題行動、「気になる」行動などの適応的ではない行動は、その行動自体が焦点化され、その行動内容や行動の変容過程について検討されることが多い。擬適応行動についてもその行動内容や変容過程の検討が必要である。しかし、幼児の適応行動には場所（場面）も要因のひとつであり、場面によって擬適応行動などのある種の行動が誘発されていることも踏まえて幼児の適応行動を考える必要がある。

適応行動のなかでも、今回、擬適応と呼んでいる客観的には適応的であるが、主観的には適応的とは言えない状態は、問題が先送りされ後に不適応行動として表れる可能性がある潜在的状態とも考えられる。その時点では適応的であり、それが将来的にも適応状態を維持しつづけるのか、不適応状態へと移行するのか、適応的にみられる行動が適応行動と言えるのか、先に問題が生じるような擬適応行動であるのかの見極めは困難である。擬適応行動を捉えるには複数の要因からの検討が必要であり、そのひとつとして心理的な「場」という要素からの視点は有用であると思われる。

今回の結果は保育者の視点から擬適応行動が評定されている。3つの場面ごとに評定されているが、保育者の活動上、場面への関与度は一様ではなく、また、保育者の評定には個々の保育者の保育観や子ども観が反映される。今後、保育者の保育観や子ども観も考慮して、保育者が認識する幼児の擬適応行動を捉える必要がある。その上で、その行動がどのようにして生起しているのか、環境によって

誘発されているのか、あるいは本質的な問題を表しているのかを検討する必要があると考える。

#### 引用文献

- Bronfenbrenner, U. (2004) *Making Human Beings Human: Bio-ecological Perspective on Human Development*. Sage Publications.
- 堀池美菜子・富田昌平・村田陽子・久保秀和 1999 幼児の園生活におけるストレスに関する研究 幼年教育研究年俵, 21, 19-25.
- 井口均 2000 保育者が問題にする「気になる子」についての傾向分析 長崎大学教育学部紀要—教育科学—, 59, 1-16.
- 小林真 2003 幼稚園生活における幼児のストレス対処行動—保育者の評定に基づく実態調査— 富山大学教育学部紀要, 57, 167-174.
- 厚生省児童家庭局 1999 保育所保育指針.
- 倉持清美・柴坂寿子 1996 幼稚園生活を通じた子どもの変容—ある問題を抱えた子どもの事例から— 保育学研究, 34-2, 152-159.
- 西元直美 2006 「気になる」子はなぜ「気になる」のか? —「気になる」子を捉える構造の検討— 日本発達心理学会 第17回大会発表論文集(九州大学), 360.
- 西元直美 2007 保育者が認識する「気になる」行動群の検討—事例の回顧的データを用いて— 日本発達心理学会 第18回大会発表論文集(埼玉大学), 297.
- 吉村智恵子 2003 幼稚園で「気になる子」の傾向—保育者の記述分類— 名古屋女子大学紀要, 49(人・社), 55-65.

(受稿: 2008年7月19日 受理: 2008年9月5日)